九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ダイエットと拒食症に関する社会学的一考察 : 消費する身体・コントロールする身体

藤嶋, 康隆
九州大学大学院人間環境学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/3654

出版情報：人間科学共生社会学. 4, pp.61-73, 2004-02-13. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

ダイエットと拒食症に関する社会学的一考察

― 消費する身体・コントロールする身体 ―

藤　嶋　康　隆

要　旨

本稿の分析はダイエットと拒食症の生成メカニズムを社会学的に分析することである。その際、従来語られるような、ダイエットが拒食症に発展するという図式とは別の説明図式を提案した。

ダイエットとは「資本」が自己の自己差異化運動を存続させるために消費者に与える「差異」刺激によるものである。資本の消費者に対する広告による「差異」刺激は消費者に「他者の欲望」を欲望するという人間本来の性質があることを利用して行われている。資本は人間のこの性質を利用することによって「流通過程」における危機を乗り越えた。これが一般に「消費社会」と呼ばれる社会状態である。

一方、拒食症はダイエットと資本のこうした関係からは説明できない。拒食症の発生は人間が他者との関係を完璧にコントロール可能なものとしたいにもかかわらず、それが現実には不可能なことに原因がある。そして自己と他者のこうした非対称性は、人間（現存在）に「死の欲動」や「存在論的不安」といった人間本来の「危機」を顕現させる。拒食症者は「無」に向かう存在としての人間の本質を具体的な行動で示しているのである。

キーワード：消費する身体、コントロールする身体、無

1　本論の目的

筆者はこれまで2002年に「共生社会学」において「精神分析における他者概念の社会学的研究」、さらに2003年に「精神分析のどこが間違っているのか」と題した論文を報告した。この二つの論文は「自我」・「他者」を共通のテーマとしているという点で一連のシリーズとなっており、今回の報告がその完結編となる。

本論文が完結編となるにあたって、これまでの「自我」・「他者」論に、筆者のもう一つの研究分野である「経済システム論」を融合することを試みたい。そこで取り上げる社会現象が「ダイエット」と「拒食症」である。ダイエットや拒食症に関してはすでにさまざまな研究が

なされているがそれらの多くの研究がダイエット→拒食症というベクトルでこの二つの現象を分析している。とりわけその中でも有名な著作である浅野知恵氏の『女はなぜやせようとするのか — 摂食障害とジェンダー —』でもダイエットから摂食障害へという回路で論文が構想されている。(浅野1996：v)

本論文ではダイエット→拒食症という回路とは別の視点でつかみとれる摂食障害について分析したい。ただし、本報告では、ダイエットについては経済システムとの関わりから分析し、そして拒食症についてはそれとは別の、具体的には拒食症を「社会関係の病理」ととらえるスタンスをとりたい。

2　主語としての「資本」

前節で筆者はダイエットを経済システムとの関わりから論じると記述した。このことはいったいどのような事象をさすのであろうか。ここでは「資本」という概念に着目して論を進めよう。

「資本」の分析についてについてもっとも卓越した業績をなしたのはいうまでもなくカール・マルクス（Karl Marx）である。マルクスの残した理論はこれまでさまざまな解釈を許容してきたが、本稿ではまずジェソップの整理にもとづいてアルチュセールの解釈を受容することにしよう。

ジェソップはこれまでのマルクス主義の理論を大きく、「資本理論」アプローチと「階級理論」アプローチに分類する。(Jessop 1990＝1995)

資本理論アプローチとは社会の動態の根源に「資本の運動」を見いだす方法論であり、資本主義国家や社会制度を本質的に、資本蓄積の命令を支えるものと見なす。

これに対して階級理論的アプローチとは，『共産党宣言』の「これまで存在した社会の全ての歴史は，階級闘争の歴史である。」というセンテンスに反映されているように、社会の性質を、異なる利害関係を持つ階級によって構成されているとみなし、それらが経済的、政治的に対立しながら競合していくところに社会の動態分析の視点をおく見解である。アルチュセールはマルクスには『ドイツイデオロギー』以降、「認識論的切断」が存在し、マルクスはそれ以前の人間中心的理論から構造主義的理論へと移行したと指摘している。つまり、ジェソップの整理にもとづいて論じるならば「階級理論」的アプローチから「資本理論」的アプローチへの移行である。本稿では、アルチュセールの整理を受容することにしよう[1]。

それでは「資本理論」的アプローチとはどのようなものであろうか。まずはこの説明からはじめよう。

マルクスは「貨幣」と「商品」の間の関係のメタモルフォーゼに資本の性質を見いだす。マルクスは貨幣の資本への転化が、貨幣（Geld）と商品（Ware）との関係において、商品を手に入れるために貨幣を手放す＝買いのための売り（der Verkauf für Kauf）という行為が、

貨幣を手に入れるために商品を売る＝売りのための買い（der Kauf für Verkauf）という行為へ変化したときに生じると論じている。マルクスの表記法を用いるならばW—G—W'からG—W—G'（G＋⊿G）への移行である。

流通G—W—G'をもっと詳しく見てみよう。それは、単純な商品流通と同じに、二つの反対の段階を通る。第一の段階G—W、買いでは貨幣が商品に転化される。第二の段階W—G'、売りでは商品が貨幣に再転化される。二つの段階の統一は…貨幣で商品を買い、商品で貨幣を買うという総運動である。この全過程が消えてしまっているその結果は、貨幣と貨幣との交換G—G'である。」（Marx 1962 : 162＝1972 : 258-259）

資本は最終的には途中の経過を無視すればG—G'という目的のために運動している。ではG—G'の目的はいったい何なのか。

単純な商品流通—買いのための売り—は流通の外にある最終目的、使用価値の取得、欲望の充足のために手段として役立つ。これに反して、資本としての貨幣の流通は自己目的である。というのは、価値の増殖は、ただこの絶えず更新される運動の中にだけ存在するのだからである。それだから、資本の運動には限度がないのである。（Marx 1962 : 167＝1972 : 266）

資本の運動の特定の目的とは価値の無際限な増殖である。W—G—W＝貨幣が商品と交換される限り、貨幣は人間の支配下にある。なぜならその交換においては人間の生理的な欲望を満たす媒体にすぎないからだ。しかし、この運動がG—W—G'に変化したときそうした外観は失われる。なぜなら、貨幣は交換されないかぎりは、人間の欲望を満たすことはできないからだ。貨幣は「食べられない」し、貨幣を所有している限り、いかなる商品も手元にない。この瞬間から貨幣は人間の支配から解放される。ルーマンから見ればこの事態は、経済システムが、貨幣メディアの「支払い／非支払い」という作動によってシステムが接続している状態であり、文字どうりシステムメディアの非人格化である。それと同時にこのシステム作動は人間（＝心的システムの観察）にとって一つの物理的実体となる。

価値はこの運動の中で消えてしまわずに絶えず一方の形態から他方の形態に移っていき、そのようにして、一つの自動的な主体（automatisches Subjekt）に転化する。…価値はここでの過程の一つの主体となるのであってこの過程の中で絶えず貨幣と商品に形態を変化しながら…自分自身を増殖するのである。なぜなら価値が剰余価値を付け加える運動は、価値自身の運動であり、価値の増殖であり、したがって自己増殖（Selbst-verwertung）であるからである。（Marx 1962 : 169＝1972 : 206）

貨幣はこのようなメタモルフォーゼを繰り返し、自動的な主体となる。そこで本稿では以後、資本を「主語」としてあつかう。(例　資本が～する）そこでは人間が貨幣（資本）を用いているはずなのに、貨幣（資本）が人間を操っているのである。

3　売りの困難と消費社会論

さてここで自動的主体である資本を解剖してみよう。資本M—C—M'（M＋⊿M）は二つの過程に分解できる。すなわちM—CとC—M'である。ここでC—M'について考えてみよう。この段階は商品が貨幣と交換される局面いわゆる「消費」の局面である。

ルーマンはマルクスが資本／労働という区別を用いて資本主義を分析することを批判する。

現代の経験を資本と労働の区別を用いて適切に整理することは今日ではもはや不可能であるという事実は、経済システムの内部ですでに示されている。「経済」というとただ生産だけを思い浮かべるケースがあまりにも多い。…労働者が演じる消費者として役割ひとつをとっても、この資本・労働図式には従っていない。その証拠に、一方で経済の存続は次の点、すなわちすべての参加者が支払い能力を現に持ち続けること、そして労働者もまた、いやとりわけ労働者が、消費能力をもち続けること、にかかっており、資本家は誰であれ、自己の市場の維持に関心を持つのである。他方でまた、労働者の関心事は消費者の関心事である。(Luhmann 1988 : 164-165＝1991 : 161)

ところがマルクスが関心を持っているのはむしろルーマンとまったく同じ問題なのである。マルクスはこのことを資本主義に必然的な「矛盾」と呼んでいるのである。

よく知られているようにマルクスは資本主義社会の一つの矛盾として「社会的生産の私的所有」をあげている。このことが必然的に意味するのは商品の生産が必然的に流通に移行せざるを得ないということである。つまり生産過程における＜資本／労働＞の区別から、流通過程における＜生産者／消費者＞への区別の変化である。

資本を支配隷属関係から区別するのは、まさに、労働者が消費者および交換価値措定者として資本に相対するのであり、貨幣所持者の形態、貨幣の形態で流通の単純な起点—流通の無限に多くの起点の一つ—になる、ということであって、ここでは労働者の労働者としての規定性が消し去られているのである。(Marx 1981 : 333＝1993 : 350)

これを柄谷（Karatani 1995 ; 157-168）にならって売り（selling）の困難と呼んでもよいであろう。

マルクスのいう通り、資本の労働への支配と、それと同時に資本の生命は労働者が資本家に

対して消費者として立ち現れることで終わるはずだった。

ところが資本はこの困難をいともなく克服してしまう。ではどのようにして資本はこの困難を克服したのか[2]。

それは資本が、人間は「他者の欲望」を欲望するという人間の本質的な性質を発見することによって可能になった。

「他者の欲望」を欲望する人間という概念は、ラカンが提唱したものであるのであるが、これは、はたしてどういった事態をさすのであろうか。例えば以下のような例を挙げてみよう。

ある少年が、プロ野球の選手になりたいと希望したとする。しかし、彼は現実にプロ野球の選手として活動した経験はもちろんない。ではどうしてかれはそのような希望を抱くのか。それはプロ野球の選手の活躍をテレビや球場で観戦し、その脚光のすばらしさに感動したからであろう。彼はまさにプロ野球の選手としてそのような活躍、脚光をあびたいのである。ラカンがいう「他者の欲望」を欲望する人間とはまさにこういった事態をあらわしている。プロ野球の選手になる夢をいだく少年はまさに「他者の欲望」を欲望したのである。　社会的なさまざまな流行現象などもこの例にあてはまるであろう[3]。また「有名だから」、「人気があるから」という基準で物事を判断するのもこの事例にあてはまる。1980年代に急速に拡大した消費社会現象とはまさに資本がこうした人間の本質を最大限活用したものであるといえるであろう。広告に代弁されるテレビコマーシャルなどのメディア文化はまさにその典型である。北田（2000 : 192, 196）が指摘しているように広告にかかわる言説は<「広告であること」を顕示しつつ隠蔽する>という、広告が素朴に実践し、また克服してしまっているパラドクスを何の代償もなく「排除」し、志向するもの／志向される対象の差異を導入せざるをえない<意味>の領域へと飼い慣らそうとしており、それらは広告の受け手に対して「解釈」する猶予を与えないのである。

消費者はそうした過程で商品をあたかも自らの<欲求>であったかのごとく<欲望>するのでる。

4　ダイエットと自己の消費

広告は広告の受け手に対して解釈する猶予をあたえない。ダイエットに夢中になる女性は社会が与えてくれるあまりにもせまいすきまに自分をあてはめようとして身を削りつづける人間であり、彼女たちは社会からのメーセージ、命令に過度に忠実に従うのである。（中島1993 : 228-258）

広告は確率的＝郵便的に（東 1999）一定の伝達「速度」をもって発信される。そのため広告が送り出すメーセージは消費者に届かなかったり、届いたりする。そのため資本は自己差異化運動によって日々商品を生み出しつづけるのであるが、そうした資本の自己差異化運動の郵便的な刺激にたまたま反応してしまったのが女性であろう。

資本のこうした自己差異化運動は梅沢（1995）の指摘するように自己組織システムまたは、自己準拠システムとして理解できるかもしれない[4]。

資本が送信する広告を含む、メディアによる美女のイメージ形成過程は、メディアの種類、内容のジャンル、伝達方法などが相互に影響しあいながら、全体として私たちの意識と行動の形成に大きな影響を持っている。ドラマなどでやせ形の美女が活躍すれば、自分もそうなりたいというひそかな願望をいだき、それが「他人がよいとするもの＝他者の欲望」となり、それに女性を従属させることになる。（参考 小玉 1996：240-263）そこでは理想的なB—W—Hや体重が女性の無意識に浸透し、カロリーゼロのコカコーラやアミノ酸飲料などが積極的に受容される。つまり、彼女たちの関心は自らの身体に向かい、そうした飲料やダイエット食品を通して自己の身体を「消費」することになるのである。

さらにもともと既存の社会のジェンダー規範においては男性はみる「主体」であり、女性はみられる「対象」であるという傾向が存在しており、女性は自らを潜在的な「商品」であると察知する。（浅野 1995：75-109）女性はそうなれば男性により高く評価される（買ってもらう）ために、ダイエット熱にますます拍車がかかることになってしまう。こうして資本は広告に代表されるメディアを通して「他者の欲望」を刺激しながら消費社会（資本の自己差異化運動による商品の開発と消費）を加速させていくのである。人間は他者（資本）から与えられた何らかの「物語」を生産・消費することを繰り返しながら暮らしていくのである。

5　拒食症（神経性無食欲症）発生のメカニズム

前節において「ダイエット」についての分析を行なったが、それには資本の自己差異化運動が関係していることが明らかになった。本稿の冒頭で論じたように、拒食症（神経性無食欲症）は従来考えられているのとは違い、ダイエットとは無関係である側面があることを本節以降で論じることにしたい。

ブルムベルグ（Brurmberg, 1988：12-13）によれば摂食障害と診断された患者の19％が死亡しているという。こうした現実は、単なるダイエットの延長としての拒食症という考え方に疑問を生じさせる。なぜならダイエットとは資本主義社会における自己の身体の「消費」現象にすぎないからである。

下坂（1999）によれば、拒食症の人々は強迫的な性格（obsessive personality）であることが共通の認識となっているという。強迫的な性格とは「すべてをコントロールしようとする心構え」のことである。その性格は他者との関係にも現れる。彼らが内心で痛切に願っていることは例えば「誰からも好かれたい」という感覚である。彼らは他者の心の動きをつねに読みとることに専念する。このような対人態度は、他人を無害で常時好意をもってくれる者と規定したいという他者支配の現れである。

しかし、こうした他者支配は現実には不可能である。他者の心を正確に読みとることなどで

きるはずがない。このような他者支配の不可能性が自己の身体のコントロールへと向かわせる。なぜなら自己の身体だけは自分自身でコントロール可能であるからである。

自分が、自分の思い通りにならぬ自分を唯一摂食という形で自在にコントロールできるというこの体験がかれらに自分にも力があるという感覚を与えてくれる。無食欲症者は他の人たちに食事を食べさせる（他の人に押しつけさえする）ように、自分の感情を他人に「手渡す」のである。無食欲症者は、自分の感情と経験をじかにもち続けられない分だけ、それらを外界に投影し、他人に投影してしまう。それはちょうど、誰かに届けるために荷造りされている小包のようなものである。(Orbach 1986＝1992 : 135)

女性が社会に積極的に進出するようになった現在では、女性たちはこうした危険に常にさらされているといえるであろう。なぜなら、「女の社会進出が進んだとはいえ、現実の社会で女に開かれている自己実現のための選択肢はきわめて限られている。そのとき、これまでの女の自己意識と身体との強い一体性を考えれば、多くの女たちが自分の自由になる唯一の所有物である自己の身体を思い通りに加工することを通して、かけがいのない私探しというアイデンティティ・ゲームに参加するしようするのは、むしろ自然なこと」（荻野 1996 : 178）であるからである。

これまでみてきたように拒食症とは、社会関係の病、つまり社会的コミュニケーションの場で具体的なコンテキストに応じて「自己とは違う他者」の存在を認められない病理であるといえよう。

6　無重力の身体

すでに論じたように、摂食障害と診断された患者の19%が死亡しているという指摘もある。こうした事実はダイエットから拒食症になるという実体からは説明できない。

では、いったい拒食症という現象の背後には一体何が隠されているのであろうか。大平（大平1996 : 142-143）は、摂食障害の患者と接した時の会話を以下のように記述している。

大平：「身体の感じはどうなのですか？」
患者の女性：「信じられないくらい！ 時々ね、ふっと私、身体がないんじゃないかって気がするんです。すごい開放感！ 宇宙飛行士ってこういう感じかなって思う。」
大平：「宇宙飛行士？」
患者の女性：「そう。無重力飛行（ゼロ・グラヴィティフライト）って全然身体の重さ感じないんでしょう？」
大平：「私はハッとした。無重力飛行か……。」

ここで患者の女性は、女性は自らの身体を無重力に例えている。このことは筆者にフロイト

の論じる「死の欲動」を連想させる。

フロイトの思考の軌跡をたどってみると一般的によく知られているように、第一次大戦後にその概念枠組みに大きな変化が起こったことが見て取れる。それまでフロイトは快感原則と現実原則の二つが人間を支配していると考えていた。快感原則が現実原則と葛藤しつつ、自己は自己を維持しようとしているとフロイトは考えていたのである。しかし、このようなフロイトの態度は大戦後に多数報告された「戦争神経症」という事態に直面して一変する。戦争神経症の患者は、自己にとって耐え難い経験を繰り返し反復する。自己にとって苦痛を伴う記憶を繰り返し反復するという患者の症状はこれまでフロイトが考えてきた理論的フレームにはおさまりきれない。そこでフロイトは快感原則よりも優越する原則があると考え、それを「死の欲動」と名付けた。

『快感原則の彼岸』(1920) という論文で生命の起源についての考察ならびに生物学上の対比から出発しつつ、生物を保存しつぎつぎにもっと大きな単位へと集約しようとする欲動のほかに、それとは正反対の、これらの単位を解消し、原初の無機状態へ戻そうとする努める別の欲動が存在するに違いないという結論に達した。…次に浮かんだのはこの死の欲動の一部は外界に向かい、その場合には攻撃欲動や破壊活動としてあらわれるのではないかということである。その場合には生物が自分自身を攻撃するかわりに，他の物を破壊するわけであるから、この死の欲動自身、しいてエロスに奉仕させられるのだといっていいだろう。反対に、この自分以外のものにたいする攻撃を制限すると、その結果は、さなきだに常時進行している自己破壊の促進ということにならざるをえないだろう。(Freud 1930＝1969 : 474-475)

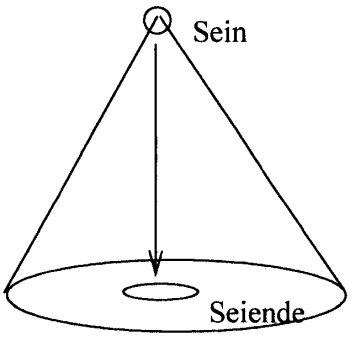
フロイトがここで指摘する「死の欲動」とはフロイト自身が指摘しているように自己破壊であり、自己を「無」に帰するような衝動である。

『形而上学入門』(1953＝1994) においてハイデガーは、その冒頭から「なぜ一体、存在者があるのか、そしてむしろ無があるのではないか？」という疑問を何回も連発する。しかも、この問いは哲学にとって最も重要な問いだという。

これだけではいったい何を意味しているのか分からないが、木田元のハイデガー解釈をみると、この意味を理解できる。

周知の通り、ハイデガーは、「ある」ということの意味をめぐって「存在 (Sein)」と「存在者 (Seiende)」を区別した。人間は意図的にではないが常に自分が存在する環境世界をみわたす視点を確保している。そうした視点を確保した上で、自分を含む世界のあらゆるものが「存在するもの」つまり「存在者」として見えてくる。こうした人間が無意識に設定してしてしまうメタレベルからの視点をハイデガーは「存在」と呼ぶ。『存在と時間』の時点ではハイデガーは、そうしたメタレベルの視点を設定する存在者を存在に優先させていた。(木田 1993 : 87-88)

しかし、後期ハイデガーではこの二つの概念の優先関係が逆転する。存在者は、まず存在という視点が設定され、そこにたってみてはじめて、おのれがその出来事の生起する場であることが、つまり<存在者>であることを自覚する。とすれば存在という視点の設定は、存在者のもとで生起する出来事にちがいないが、同時に存在者の力をこえた事態である。つまり後期ハイデッガーは「存在者が存在を規定する」のではなく、「存在（メタレベルの視点）が存在者（オブジェクトレベル）を規定する」という理論的付置への転回をおこなったのである。（木田1993：141-143）



このように考えれば「なぜ一体、存在者があるのか、そしてむしろ無があるのではないか？」というハイデガーの問いの意味も簡単に見えてくる。つまりこの問いはこのような後期ハイデガーの転回から生じたもので、存在からみて存在者が、自己言及の無限遡行から帰結する無（自己の無性 Nichitigkeit）＝欠如であることを指摘しているのである。

人間（現存在）が死に向かう存在であり（死の欲動）、そして死とは何かを人間は決して語ること（言語化）ができないかぎり人間は、言語によって構造化された世界においては「無」である他はない。そこにおいては人間は無であることを根拠に存在しているのである。

先に人間が「他者の欲望」を欲望する存在であることを指摘したが、このことは人間には「自己」の欲望が存在していないことを意味している。つまり自己は欲望としては欠如（vide）としてしか存在し得ないのである。

このことはミードにおける 有名な自我の定義である<Ｉ／me>の区別において‘Ｉ’というものが存在しえようがないということを意味している。人間は常に‘me’としてしか存在できないのである。これがラカンが後に構造主義者と呼ばれるゆえんである。人間は社会関係の網の目でしかないのである。

拒食症者は人間が「死の欲動」を持っていることを体現しており、人間が「無」でしかありようがないことを具現化している。その意味では拒食症とは決して病気ではなく、人間存在の本質的な性格（＝存在論的不安）を現しているのである。

人間存在のこうした性質を形容するような概念は残念ながら従来の社会学には存在しない。そのため本稿では本論の進行の一部をフロイト、ハイデガーといった社会学周辺の学問領域に依存せざるをえなかった。（ラカンなら「死の欲動」、「存在論的不安」を欲望の「現実界」と呼ぶであろうが…。）このことは既存の社会学の不備を指摘していると同時に、筆者にこれらの概念を「現実科学」・「経験科学」としての社会学の用語に翻訳する（社会学的コード化）という課題を与えてくれたことになる。

7　まとめと展望

第一節で論じたように本稿は、筆者の「自我」・「他者」論三部作の完結編である。これら一連の論文を貫いているモチーフは次のようなものである。

人間は自己の主観的世界＝自己の宇宙に閉じこめられている。人間が自己の主観的世界に閉じこめられているとすれば、「他者」の考えていること＝他者の主観的世界（自己の「外部」）などにはとうてい到達できない。にもかかわらず神経症者や拒食症者はこの不可能性を飛び越えようとする。もちろんこうした傾向は一般的な人々にも当てはまることである。われわれは「他者」と同じ世界に住んでいると当然視しているし、またこのことを前提にコミュニケーションを行っている。しかし、当然誰でも現実のコミュニケーションにおいて「え、そんな風に考えていたの！」といった驚きに直面することがある。神経症者や拒食症者はこうした事態を過度に「積分」し、自己の対他的関係をコントロール可能なものとしようとしてしまう。つまり、神経症者や拒食症者はコミュニケーションにおける「自己と他者の非対称性」を極端に体現しているにすぎないのである。このことが神経症や拒食症を引き起こすのである。

ここで自己と他者のどうしようもない「非対称性」を乗り越えようとすれば、もはや個人を前提とした社会理論は受容できない。

こうした「非対称性」を乗り越えるための逃走線は個人と個人の間で成立する「コミュニケーション」を一つの自己準拠的なシステムと見なすことである。社会をコミュニケーションの自己準拠的な接続の再生産として理解すれば、全く違った社会観を描くことができるであろう。

ドイツの偉大な社会学者ルーマンが行っている理論的展開はこうした背景をもっているのではないかと筆者は理解している。

ルーマン的システム論の理解に基づけば人間とはコミュニケーションの結節点において「心的システム」として存在している一システムにすぎないのであり、なんら特権性（個人主義）を与えられない。

しかし、それと同時に社会という全体を前提にしないという意味では集合主義ではない。

むしろルーマン的システム論は個人主義／集合主義、ミクロ／マクロという区別とは異なる区別を用いて社会を観察しているところにその存在意義があるのではないでろうか。

注

(1)　ジェソップは「階級理論」的アプローチと「資本理論」的アプローチを克服するものとして独自に「戦略理論」的アプローチを提起しているが、このアプローチにも困難性が存在している。

(2)　この点に関しては柄谷（Karatani 2003）と見解が異なっている。柄谷は労働者が消費の局面において消費者になることに資本主義を止揚する開口部（opening）をみている。

(3) マルクスは、生産段階での剰余価値の生産について「絶対的剰余価値」と「相対的剰余価値」の区別をもうけている。絶対的剰余価値とは通常資本家に原因をもつ「搾取」と呼ばれるものであり、労働日の延長や労働の酷使によって剰余価値を得るものである。その一方相対的剰余価値とは、労働日はそのまま、もしくは短縮する形で、労働の生産性をあげ、労働の価値をさげることによって剰余価値を得るものである。現在の資本主義は、技術革新による労働時間の短縮、そして労働の生産性をあげることで労働価値を低下させる「相対的剰余価値」の段階にある。宇野弘蔵はこの相対的剰余価値の生産こそが資本主義の自立的＝自己準拠的性質の展開をみている。

かくて相対的剰余価値の生産とともに資本家的生産方法は、特殊な動力を与えられて発展する。労働時間の延長による絶対的剰余価値の生産ではこの動力は理解できない。(宇野 1977 : 83)

また資本の自己差異化運動とは、資本が貨幣を「盲点」として商品／非商品という区別を設け、市場を生み出す運動のことを意味するが、資本はこの運動を繰り返し更新しながら消費者を刺激し続けている。

「盲点」と「区別」という概念はルーマンがシステム論において「観察」という局面で導入したものである。ルーマンによればわれわれは常に何らかの形で社会を観察しているのであるがこれこそがシステムの作動ということになる。システムはX／Yという区別を用いて社会を観察しているがX／Yという区別を基礎づけている根拠自体は観察できない。これが「盲点」とよばれる。しかし、この「盲点」は別の「盲点」に基づいた観察＝セカンドオーダーによって明らかにすることができる。

商品と貨幣の関係はルーマンのこの観察の概念によって整理できると筆者は考えている。貨幣はあらゆる商品の連関を一元的に体系づける根拠である。それとともにこの貨幣という存在を自明視する商品体系は貨幣の無根拠性を盲点（ゼロ中心）として商品体系を上から支えていることになる。

(4) 岩井克人（1995 : 66-68）はまったく別の文脈ではあるが以下のように論じている。

確かに資本主義社会において人々は、自分の労働力や自分の生産物をほかの人間に売らないと生きていけません。それはもちろん人間の尊厳を傷つけてしまうことではあります。しかし、そのことを別の角度から言い換えてみると、資本主義においては、その中に生きるどのような人間でも、永遠に独善的であることはできないということでもあるのです。自分の労働力であれ、自分の生産したものであれ、それは他人による評価を通してはじめて価値を持つことになる。

岩井がここでいう「他人による評価」こそが他者の欲望であるといえるであろう。

文　献

浅野千恵、1995、「潜在的商品としての身体と摂食障害」『性の商品化 — フェミニズムの主張2』江原由美子編　勁草書房

浅野千恵、1996、『女はなぜやせようとするのか — 摂食障害とジェンダー —』 勁草書房.

東浩紀、1999、『存在論的、郵便的』新潮社.

Brumberg, 1988, *Fasting Girls : The Emergence of Anorexia Nervosa as a Modern Disease,* Harvard University Press.

Freud, 1930, *Das Unbehangen der Kultur*「文化への不満」.（=1969, 高橋義孝他訳『フロイト著作集3』人文書院.）

Heidegger, 1953, *Einführung in die Metaphysik,* Max Niemeyer Verlag.（=1994, 川原栄峰訳『形而上学入門』平凡社.）

岩井克人、1995、「貨幣とナショナリズム」『現代思想』1995, vol, 23-09. 66-68

Jessop, Bob, 1990, *State theory,* Cambridge : Polity Press.（=1995, 中谷嘉和訳『国家理論』御茶の水書房.）

Karatani, Kojin, 1995, *Architecture as Metaphor,* tr. by Sabu Kohso, MIT Press. 157-168

Karatani, Kojin, 2003, *Transcritique on Kant and Marx,* tr. by Sabu Kohso, MIT Press.

木田元、1993、『ハイデガーの思想』岩波文庫.

北田暁大、2000、『広告の誕生 — 近代メディア文化の歴史社会学 —』岩波書店.

小玉美意子、1996、「現代の美女をつくるテレビ」、小玉美意子・人間文化研究会編.『美女のイメージ』世界思想社.

Luhmann, 1988, *Die Wirtshaft der Gesellshaft,* Suhrkamp（=1991春日淳一訳『社会の経済』文真堂.）

Marx, Karl, 1962-64, *Das Kapital,* MEW23-25　Dietz Verlag.（=1972岡崎次郎訳『資本論(1)』大月書店.）

Marx, Karl, 1981, *Oekonomiche Manuskripte 1857/1858,* Teil 2, MEGA, Ⅱ/1.2, Dietz Verlag.（=1993,渡辺憲正訳『マルクス資本論草稿集②一八五七 — 五八の経済学草稿』大月書店.）

中島梓、1993、「ダイエット症候群」『フェミニズムコレクションⅡ — 性・身体・母性 —』勁草書房.

Orbach, 1986, *The Anoretic's Struggle as a Metaphor for Our Age,* W. W. Norton & Company, Inc.（=1992, 鈴木二郎・天野祐子・黒川由紀子・林百合訳『拒食症 — 女たちの誇り高い抗議と苦悩 —』新曜社.）

大平健、1996、『拒食の喜び、媚態の憂うつ — イメージ崇拝の食と性 —』岩波書店.

荻野美穂、1996、「病と医療の社会学」『岩波講座現代社会学第14巻』岩波書店.

下坂幸三、1999、『拒食と過食の心理 — 治療者のまなざし —』岩波書店.
宇野弘蔵、1977、『資本論入門』講談社学術文庫.
梅沢直樹、1995、「自己組織理論とマルクス派社会経済学」、吉田民人・鈴木正仁編著『自己組織性とは何か』ミネルヴァ書房.